

2021. 12. 1 (水)

クリスマスを彩るシンボル

打 樋 啓 史

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」
この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。

(マタイによる福音書 1章 23節)

「アドベント」の開始

12月に入って、今日から社会学部チャペルアワーの共通テーマが「クリスマスの前にして」というものになります。今年は11月28日の日曜日から「アドベント」に入りました。初めて聞く人も多いかもしれませんが、皆さんご存じの通り、12月25日のクリスマスは、キリストの降誕をお祝いするキリスト教の最大のお祭りの一つですが、キリスト教の暦では、その祝日がいきなりやって来るのではなく、クリスマスを待つ期間が定められていて、その期間のことをアドベントと呼ぶのです。

アドベントとは、ラテン語で「到来」を意味する *adventus* に由来する言葉ですが、日本語では「待降節」と言います。「降誕を待つ季節・期間」という意味です。このアドベント・待降節は、毎年、クリスマス(12月25日)の4つ前の日曜日から始まるので、今年は11月28日から始まったということです。

関西学院では、毎年アドベント初日の翌日

の月曜日夕方に、時計台前のヒマラヤスギ2本にイルミネーションが灯される「クリスマスツリー点灯式」が行われています。参加した人もいるかもしれませんね。こうして今年も関西学院のクリスマスシーズンが始まりました。社会学部チャペルでも、アドベントの季節に入ると、クリスマスを待ち望むことをテーマとしてプログラムを行っています。

アドベントの意義

私は、キリスト教のよいところの一つとして、祝日・祭りがいきなりやって来るのではなく、それを待つ期間(1カ月ほどの結構長い期間)も祭りの一部になっているということが挙げられると思います。これはなかなか粹なことです。

では、昔からこのアドベントの期間を人々はどうのように過ごしてきたのか、もちろんクリスマスという大きな祝日をワクワクしながら待ち望むわけですが、同時に、その期間はいつもより少し静かになって、自分を抑えて過ごすことが大切にされてきました。その一

環として、伝統的にはアドベントの期間に断食が行われてきたのです。「断食」と言っても、全く何も食べないわけではなく、肉を断つ、嗜好品を我慢する、などですね。今でもそのようにアドベントの期間を過ごす人は世界中に大勢います。いつもより少し禁欲的になるというのか、いつもやっていることを少し抑えて、心と体を静かにして、自分を省みながら、静かにクリスマスの喜びを待ち望む。そしてやがてクリスマスの喜びが12月24日の夜にやって来るという流れです。

時間は規則的に流れていくのですが、その中で祝日を待つ時があり、待っていた祝日が到来して盛大にお祝いする時がある。そのように季節を祝うことによって、時に彩りができるので。流れていく時に起伏が付けられ、それぞれの時に意味が与えられていく。これが暦の意味だと思うのですが、キリスト教ではアドベントからクリスマスという時の流れの中でそれが顕著なものとなります。ぜひ皆さんにも、関西学院のクリスマスシーズンにそのような時の彩りや起伏を体験していただければと願っています。

また、「待つ時」としてのアドベントについて、このようにも言えるのではないのでしょうか。何か大きな喜びの実現を待つとき、それを待っていること自体が既に喜びになっている、待っている時が既に喜びの時になっている、ということです。私が子どもの頃、今のように色んな楽しみがなかったのも、学校の遠足などがすごく楽しみでした。1カ月ぐらい前から楽しみなんです。その日は授業がなくて、友達と皆で出かけておやつを食べたりできる。そう想像すると、1カ月ぐらい前からワクワクしているわけです。

そのように遠足を待っている期間、特に直

前の1週間ぐらいは、遠足の日を待ちながら、ある意味ではもう既に遠足の楽しさを味わっているんですね。待っている間の日々も普段よりテンションが高くなって、一日一日の輝きが変わってくる。待つということにはそんな意味があると思います。心から喜びを待つ時、待っている日々も変化していき、そこで既に喜びにあずかるようになる、ということです。喜びの先取りです。

これを色んなことに当てはめて、私たちが日々過ごしている時について考えることができると思いますが、アドベントとは、そのような意味で、クリスマスの大きな喜びを先取りして、既にその喜びにあずかりながら、同時にその中で自分を少し省みながら静かになって過ごす、そういう特別な時として大切にされてきたということです。

アドベントからクリスマスのシンボル①：紫の祭壇布

アドベントからクリスマスのシーズンを意義深く過ごすために、昔からキリスト教では様々なシンボルを用いてきました。それらによって、このチャペルもとても美しく彩られています。クリスマスの飾り付けとして知られていますが、実はそれぞれがシンボルとしての意味を持っているのです。皆さんお気づきのように、この社会学部のチャペルにも、普段はないものが色々置いてあります(写真①)。今日はせっかくなので、社会学部チャペルに置かれたクリスマスのシンボルについて説明したいと思います。

まず、向かって正面中央の講壇に布が掛けられているでしょう。祭壇布・講壇布と呼びますが、お気づきでしょうか、季節によって色が

変わるんですね。緑・赤・紫・白の4色があり、キリスト教では「典礼色」と言いますが、それぞれの色に意味があります。緑は通常の色で命を表す色、赤は聖霊降臨・聖霊を表す色、白は喜びを表す色です。ですから祝日には白が使われます。

では、紫は何かと言うと、悲しみを表す色です。アドベントのカラーは紫なのです。先ほど言ったように、アドベントとはもちろん喜びを待ちつつ喜びにあずかる期間なのですが、同時に静かになって、少し我慢して、まだ喜びが来ていないということを楽しむ期間でもあるわけです。そのような意味で、昔からアドベントはある意味で一つの悲しみの期間ととらえられてきました。沈黙したり、断食したりということにもそういう面があり、アドベントの色は紫になったのです。これがクリスマス当日になると白になります。喜びの色に変わるので、このように色を使い分けることにも意味があるのですね。

アドベントからクリスマスのシンボル②：アドベントクランツ

次に、向かって正面右側に4本のロウソクが立てられています(写真②)。正確には真ん中に太い白いロウソクが1本、その周りに色のついたロウソクが4本ですね。これは「アドベントクランツ」です。「クランツ」とはドイツ語で花輪のことで、英語では「リース」といいます。4本のろうそくが立てられて、周りにこのように緑が施されて花輪のようになっています。これをどのように用いるのか。先ほど言ったように、アドベントの期間、クリスマスまでに4回の主日(日曜日)があります。アドベント第1主

日、第2主日、第3主日、第4主日があって、クリスマスに至ります。

昔からキリスト教の伝統では、アドベントの期間の4回の日曜日、教会の礼拝で、1本ずつ火を灯していくということが行われてきました。1週ごとに光が増えていくのです。今はアドベントの第1週目なので、1本のロウソクに火が灯されています。次の日曜日には火が2本に灯されます。3週目には3本、4週目には4本になって、クリスマス当日には真ん中のキリストを表す大きなロウソクにも火が灯されて完成というように、光を増やしながらクリスマスに近づいていくのです。

社会学部のチャペルでは、クリスマス当日に至る前に冬休みになってしまうので、ちょっと先取りしてクリスマスチャペルの日(今年は12月22日)にはすべてのロウソクに火を灯してお祝いします。毎週光が増えていくのを、ぜひ楽しんでください。

このロウソクの色、お分かりのように3本は紫なんです。アドベントの色、悲しみを表す色です。ところが、1本だけピンクのような色があります。ローズという色ですが、伝統的にこのローズのロウソクはアドベント第3主日、つまり3週目に灯します。どういう意味があるのかというと、アドベントは静かになって悲しを感じる期間ですが、ローズは喜びを表す色で、待つ期間がまだ続く中で、クリスマスの喜びを少し先取りしようというものです。クリスマスが待ちきれないから、忍耐強く待ち続けるために、この色のロウソクを灯して、クリスマスの喜びが近づいたことを実感しよう、という意味があります。

アドベントからクリスマスの シンボル③：クリスマスツリー

最後にクリスマスツリーです（写真③）。このように結構大きなクリスマスツリーが社会学部チャペルにはあるのですが、私が23年前に社会学部宗教主事に着任した時にはクリスマスツリーはありませんでした。他の学部にはあったので、チャペル担当の事務の方と、「クリスマスツリーを買いませんか」という話になって、それを学部長に相談したら認められて購入したのです。ですからもう20年ほど経ちますね。

クリスマスツリーを立てるのは、ドイツで始まった習慣です。宗教改革者のマルチン・ルターが最初にそれを立てたと言われますが、元々ゲルマン民族は木がたくさん生えている森の中で過ごしてきた森の民でした。ですから、ゲルマン民族のキリスト教以前からの土着の信仰として、樹木崇拜が大切にされていました。樹木に神々や精霊が宿するという昔からの信心です。

先ほど言ったように、キリスト教では緑という色は常緑樹の緑で、常緑樹とは命を表すシンボルです。聖書の中でもそのように使われています。ゲルマンの昔からの樹木崇拜という魔よけ的な意味と、キリスト教の常緑樹の命のシンボルが結び付いて、クリスマスツリーという、とてもドイツらしい文化が生まれたと言われます。ここにあるのは残念ながら本物の木ではなくイミテーションですが、なかなか立派なものではないかと思えます。

このツリーにイルミネーションが施されています。イルミネーションや光は、降誕した

イエス・キリストの命や救いや恵みを表す、クリスマスには特に重要な意味をもつものです。このようにアドベントからクリスマスの時期には色んなものがそれぞれ意味を持って、シンボルとして用いられます。それを見つめながら、アドベントを過ごす意味とクリスマスの喜びの意味を、それぞれが感じ取っていく。このように視覚に訴えるものが、キリスト教・宗教においてはとても大切なので、この期間に皆さんもぜひ触れていただければと願っています。

おわりに

私たちは待つのが苦手ではないでしょうか。今の世の中、とてもスピーディーかつインスタントな時代で、何でもすぐに手に入ります。あまり待つ必要がなく、それゆえ待つことは無意味に感じられて、人はますます待つということから遠ざかっていきます。待たずにすむことこそ発展であり、待っている暇があったら先手を打つべきだ、というような感覚が世に蔓延しています。その中で、私たちは多くの大切なものを見失ってはいないでしょうか。

だからこそ、あえて「待つ」ことに注目するアドベントに意味があります。このアドベントの期間に、「何かを待つというのなかなかいいものだ。そこにも意味があるし、良さがある」ということを、ぜひ感じ取っていただければと思います。そこから見えてくるものがきっとあるでしょう。

（社会学部教授・宗教主事）



写真①



写真②



写真③